

『イリアス』における競争に関する研究

— 戦争と運動競技における英雄ディオメデスを中心として —

Study on Competition in “Iliad”

— Focusing Diomedes in War and Contest —

小 林 日出至郎

Hideshiro KOBAYASHI

I. はじめに

ホメロスの叙事詩『イリアス』はヨーロッパ最古の文学作品であり、西洋古典文化の源流である。人類史上はじめて民主制国家を創出し、紀元前5世紀はじめ、当時、広大な土地を支配し世界最強と言われていた帝国ペルシアとの2度の戦争に勝利し、西洋古典文化を創造した古代ギリシア人を育んだ作品である。この作品はH.シュリーマンを魅了し、彼の発掘からはじまる研究により歴史的内容が語られていることが明らかとなっている。このような内容は古代ギリシア史研究に多くの示唆をもたらしているが、同時に、死すべき運命にある個々の人間にとって大切なこと、人類にとっての知恵についても語られている。人間を超える存在の不確かさ、人間の幸不幸の原因、生存競争における相互扶助の精神等、現代を生きる我々にもこの作品は貴重な示唆をもたらしている。

このような作品『イリアス』において運動競技が描写されている。その運動文化に関わる行数は叙事詩全体におよそ24分の1に相当する。生命の安全を基調とする競技、人間を超える存在と競技者の関係、勝者の栄誉の価値、フェア・プレーの精神等、これらの課題探究は人類的運動文化の本質解明とスポーツ文化の創造に繋がる可能性がある。

II. 先行研究の検討と本研究の目的

『イリアス』における運動競技(ἀθλος¹⁾)研究は、スポーツの基本的精神の解明をもたらす可能性がある。R. ハルダー、E.N. ガーディナー、J. ブルクハルトの研究等²⁾は、運動競技の精神が戦士の精神に基づくことを指摘している。運動競技における英雄精神は、戦場における命懸けの闘争精神であり、勝利による名誉や誉れを尊重する精神である³⁾。

このような観点から、運動競技の精神性に関する研究として、小林の研究『『イリアス』の運動競技に関する研究：英雄の特性を中心として』⁴⁾と『『イリアス』の運動競技における精神的特性に関する研究：神的影响を授かった英雄と他の英雄の比較を中心として』⁵⁾がある。前者では、英雄の戦士の特性として、戦場での戦いにより「名誉」(κλέος, τιμή, κῆδος)が高まること、「名誉」のために「恥」(αἰδώς, ἔλεγχος)よりも死を選ぶこと、戦場における英雄の生死は神々の作用によること、定められた運命を主体的に生きることが論述され、運動競技での勝者；神的影响による勝者は、戦士の特性と共に「困難・苦難を克服する豊かな

知性」「死を恐れない武勇」が明示されている。また後者の研究では、運動競技における勝者以外の英雄：大アイアスやスパルタ王；メネラオスにおいても同様な精神性があることが論述されている。ギリシア軍最強の英雄アキレウスに次ぐ勇将；大アイアスは、ギリシア軍の砦と評され、トロイアの総大将；最強のヘクトルと互角に戦った英雄であるが、運動競技において勝者として語られていないのである。

そこで、本研究の目的は、『イリアス』第23歌⁶⁾の運動競技において、最も多く語られる戦車競技の勝者となったディオメデスに焦点化し、彼の戦場での活躍場面を再検討し、「競争」に関する彼の特性を明らかにすることとする。

なお、テキストはHomerus (rev. by Monro DB and Allen TW) “Homeri Opera” (2vols, Oxford UP, OCT) を用い、邦訳は松平千秋訳『イリアス』(岩波)と呉茂一訳『イーリアス』(岩波)を参考とし、訳の引用には松平訳『イリアス』を用いる⁷⁾。

また、本研究における「競争」は戦争(πόλεμος)・戦闘(μάχη)と運動競技(ἄθλος)を意味する。命懸けの「競争」は戦争・戦闘であり、生命の安全を基本とする「競争」は運動競技である。

Ⅲ. 戦争におけるディオメデスの特性

1. 戦闘におけるディオメデスの勇気(θάρσος)と力(μένος)⁸⁾

第5歌では、トロイア軍とギリシア軍が全面的戦争を展開し、ギリシア軍中、彼が最も活躍する場面が語られ、彼の名誉(κλέος)が称えられている。

両軍の全面的戦争は、トロイア方総大将ヘクトルとギリシア方総大将アガメムノンの対話により、当初、回避できる可能性があった。両軍の代表、アレクサンドロス(パリς)とスパルタ王メネラオスの決闘により両軍の勝敗を決めようと、総大将の2人は約束する。その勝敗による戦争終結の誓約を彼らは神々に祈ったのである。決闘の結果、メネラオスが勝利する。しかし、戦争終結を望まぬ神々の意図により、トロイア方の豪勇パンダロスが英雄メネラオスへ矢を放つことになる。矢は彼から命を奪うことはなかったが、メネラオスはその矢により、血を流し、全面戦争が開始される。

戦争が始まり、激戦になると、活躍する英雄がアルゴス王のディオメデスである。

Ὡς οἱ μὲν πονέοντο κατὰ κρατερὴν ὑσμίνην·
 Τυδεΐδην δ' οὐκ ἂν γνοίης ποτέρουσι μετείη,
 ἥε μετὰ Τρώεσσιν ὀμιλέοι ἢ μετ' Ἀχαιοῖς.
 θύνε γὰρ ἅμ πεδίον ποταμῷ πλήθοντι ἐοικὼς
 χειμάρρῳ, ὅς τ' ὥκα ῥέων ἐκέδασσε γεφύρας·
 τὸν δ' οὔτ' ἄρ τε γέφυραι ἐεργμέναι ἰσχανόωσιν,
 οὔτ' ἄρα ἔρκεα ἴσχει ἀλωάων ἐριθηλέων
 ἐλθόντ' ἐξαπίνης, ὅτ' ἐπιβρίσῃ Διὸς ὄμβρος·
 πολλὰ δ' ὑπ' αὐτοῦ ἔργα κατήριπε κάλ' αἰζηῶν.
 ὥς ὑπὸ Τυδεΐδῃ πυκινὰ κλονέοντο φάλαγγες
 Τρώων, οὐδ' ἄρα μιν μίμνον πολέες περ ἑόντες.

9)

「そのように両軍は激戦を交えて死闘を続けていたが、この時テュデウスの子(ディオメデス)が、果してトロイエ勢の間で戦っているのか、あるいはアカイア勢と共にあるのか判らぬほどであった。戦場を疾駆する彼の姿は、水嵩を増し流れも早く堤を毀つ冬河のよう、隙なく築かれた堤もその奔流を阻みきれず、突如として襲いかかる激流は、茂り栄える果樹園の垣もこれを防ぎ得ず、逞しい農夫らの丹精籠めた田畑も水に流されて潰え去る——あたかもそのように、密に組んだトロイエ方の戦列も、テュデウスの子の前にはもろくも崩れ去り、多勢をたのむトロイエ勢も、彼の前に踏み留まることができなかった。」¹⁰⁾

戦闘中、彼はパンダロスの矢に当たり負傷する¹¹⁾ことになる。しかし、女神アテネから支援され、トロイア方の英雄を次々と倒し、恐ろしい活躍をする。この状況をパンダロスは、女神アプロディテを母とするトロイア方参謀の英雄アイネイアスに向かって、次のように語っている。

Τυδείδῃ μιν ἔγωγε δαΐφρονι πάντα εἶσκω,
 ἄσπιδι γιγνώσκων αὐλώπιδί τε τρυφαλείῃ,
 ἵππους τ' εἰσορόων· σάφα δ' οὐκ οἶδ' εἰ θεός ἐστιν.
 εἰ δ' ὃ γ' ἀνὴρ ὃν φημι, δαΐφρων Τυδέος υἱός,
 οὐχ ὃ γ' ἀνευθε θεοῦ τάδε μαίνεται, ἀλλὰ τις ἄγχι
 ἐστὶν κ' ἀθανάτων, νεφέλῃ ἐκλυμένος ὦμος,
 ὃς τούτου βέλος ὥκ' ἐκχήμενον ἔτραπεν ἄλλῃ.

12)

「あれは豪勇ディオメデスに違いないとわたしは思う。あの大盾にも、またあの頂きに飾りをつけた四つ星の兜にも見覚えがあるし、それにあの戦車を見ても判る。とはいえ、神でないとも言切れぬ。それにあの男がわたしのいう如くテュデウスの豪毅の倅であるとしても、あの荒れ狂うさまは神の助けなしでは考えられぬ。いずれかの神が、両の肩を雲に隠して付き添っておられ、わたしが射当てた疾い矢を逸らされたものに相違ない。」¹³⁾このようなディオメデスに対し、アイネイアスとパンダロスは戦車に乗って怯むことなく突撃する。しかし、パンダロスは彼の槍に倒れ、アイネイアスは彼の投石により瀕死の状況となる。

以上のように、戦闘におけるディオメデスの勇氣と力はトロイア方の英雄を圧倒し、第5歌で語られる彼の活躍はギリシア方英雄の中で最も際立っている。また、彼はトロイア方豪勇パンダロスを倒している。パンダロスは、主神ゼウスの判断とアテネ神の仕掛けにより、両軍の全面戦争へと導く矢を、英雄メネラオスに向けて引いた戦士であり、両軍総大将の誓約破棄をもたらした人物である。トロイア方英雄の活躍にはアポロン神・アレス神・女神アプロディテ等の支援があると同様に、英雄ディオメデスの活躍の背景にも、戦場で輝く彼の勇氣と力を女神アテネが鼓舞していることが語られている。

2. 戦場における賢明な行為

1) 軍神アレス神とディオメデスの戦い

『イリアス』における神々は不死ではあるが、感情を持ち、戦争に参加し、負傷するという場面が語られ、人間と同様な特性がある。第5歌では戦争を好むアレス神と英雄ディオメデスの闘いが表現されている。アレス神との戦いにおいて、ディオメデスは、女神アテネの助言を守り、女神に支援されながら勝利を得ることになる。

英雄ディオメデスは、ギリシア軍とトロイア軍が全面戦争となる矢を放ったパンダロスを倒した時、女神アプロディテを母とする英雄アイネイアスをも瀕死の状態にする。女神はこの時、息子を戦場より救おうとするが、ディオメデスは女神アプロディテの姿を捉え、女神の手を槍で突いている。¹⁴⁾女神は負傷し、神々の居場所へ戻り傷を癒すことになる。女神に救出されなかったアイネイアスはトロイア軍を支援するアポロン神により救出される。アポロン神はディオメデスを懲らしめるようアレス神に語りかけ¹⁵⁾、戦争を好むこの軍神は彼に立ち向かうことになる。しかし、戦場にアレス神を見つけた英雄ディオメデスはこの軍神から賢く身を引き戦闘を中止する。それは、彼が女神アテネの次の忠告を戦場において冷静に守っていたからである。

ἀχλὺν δ' αὖ τοι ἀπ' ὀφθαλμῶν ἔλον, ἥ πρὶν ἐπῆεν,
 ὄφρ' εὖ γιγνώσκῃς ἡμὲν θεὸν ἠδὲ καὶ ἄνδρα.
 τῷ νῦν, αἶ κε θεὸς πειρώμενος ἐνθάδ' ἵκηται,
 μή τι σύ γ' ἀθανάτοισι θεοῖς ἀντικρὺ μάχεσθαι
 τοῖς ἄλλοις· ἀτὰρ εἴ κε Διὸς θυγάτηρ Ἀφροδίτη
 ἔλθῃσ' ἐς πόλεμον, τήν γ' οὐτάμεν ὀξεί χυλκῶ.

16)

「またこれまでそなたの眼にかかっていた霧も掃い、神と人間との見境がはつきりつくようにもしておいた。されば、もし神の身でそなたを試そうとこの場に現われる者があつたら、神々には決してまともにかかって戦ってはならぬ。ただ、ゼウスの娘アプロディテが戦いに手出しをした場合には、構わぬから鋭い刃で切りつけておやり。」¹⁷⁾

しかし、英雄ディオメデスは軍神アレスに戦いを挑むことになる。その決断は、女神アテネの助言による。女神は彼に軍神アレスを恐れることはないことを告げる¹⁸⁾。軍神と彼の槍の格闘が始まり、女神アテネの支援の下、軍神が負傷する結果となり、戦場から神々の居場所へ立ち去ることになる¹⁹⁾。

英雄ディオメデスの以上の戦いは、第21歌における英雄アキレウスと河神の戦いと比較すると賢明である。アキレウスと河神の戦いは、彼の自惚れから起こっている。女神テティスを母とするギリシア軍最強の英雄アキレウスは、無二の戦友パトロクロスの戦死を知り、戦線に加わる。そして次々にトロイア勇士を倒し、トロイア軍を恐怖に陥れることになる。この勢いの中、彼は自分の力を過信し、挑む必要のない河神と戦い、殺されそうになる。²⁰⁾ もし海神ポセイダオンと女神アテネの救援がなければ、河神への彼の戦いは無謀な死の結果をもたらしていた可能性がある。軍神アレスと戦ったディオメデスは、河神に挑んだアキレウスと比較すると賢明な英雄として語られている。

2) デイオメデスに関する「賢明さ」：知恵 (νόος)・才覚 (μῆτις)・思慮 (νóημα)

ディオメデスの「賢明さ」は、軍神アレスとの戦いにおいて理解することが可能である。彼はトロイア軍とギリシア軍の全面戦争開始において活躍する。特に、パンダロスの矢に傷ついた後、女神アテネの支援を受け、両軍の激戦の中、次々とトロイア方勇士を倒し、女神アプロディテを母とする英雄アイネイアスと戦い、勝利を得ている。英雄アイネイアスはアポロン神に助けられたが、ギリシア軍最強のアキレウスと戦う力量があり²¹⁾、トロイア軍の参謀でもある。この英雄を倒す活躍を、英雄ディオメデスがする中、彼は冷静に、アレス神に対応している。この戦場における英雄ディオメデスは、女神アテネからの言葉を把握する力量があり、負傷しつつもその女神から授かった勇氣 (θάρσος) と力 (méνος) を活かす「賢明さ」が育まれていたのである。

彼の「賢明さ」は、劣勢になったギリシア軍が敵陣トロイア軍の情勢を偵察する場面でも描写されている。ギリシア軍が劣勢になった要因は、総大将アガメムノンと英雄アキレウスの喧嘩、最高神ゼウスがこの戦争経過を認めたこと、トロイア方総大将ヘクトルの活躍等による。ギリシア軍は劣勢な状況を回復するため、総帥アガメムノンを中心に集会を開き、敵陣の偵察を決める。同席する大アイアス、メネラオス、メリオネス等の英雄たちの中から、ディオメデスが自からその任を引き受けることを提案し、もう1人の同行者と共に行動したいことを伝える。1人で偵察するよりも2人の方が気持ちにゆとりが生まれ気丈夫になり、お互いの協力から、知恵 (νόος) と才覚 (μῆτις) をより一層、発揮できること²²⁾ このようなことを彼は集会者たちに説明する。すると、同席していた英雄たちが彼と共に行動することを希望する。そこで総帥が家柄を気にせず最適者を選ぶことを指示すると、ディオメデスはギリシア軍の中、最も「賢明」であると判断する英雄オデュッセウスを指名する。オデュッセウスは、後に(第19歌)食事をせず、参戦しようとする無謀な英雄アキレウスに対して²³⁾、食事が力 (méνος) と武勇 (ἀλκή) ²⁴⁾ の基である理を説きつつ²⁵⁾、強情なアキレウスを説得した思慮 (νóημα) ²⁶⁾ ある英雄でもある。この英雄と共にディオメデスは骨の折れる偵察を遂行し、途中、ただ一人で偵察活動をしていたトロイア方英雄ドロンを倒し、敵陣に潜伏し状況を把握し、無事に味方陣へ帰還する。

以上のように英雄ディオメデスは軍神アレスの戦い及びトロイア軍偵察において、賢明な能力を発揮している。女神アテネから支援される勇氣 (θάρσος) と力 (méνος) があっても、知恵 (νόος)・才覚 (μῆτις)・思慮 (νóημα) の伴わない行為は、戦争における英雄たちの自己破滅に繋がっている。戦争における英雄ディオメデスの特性は女神アテネからの支援を授かる気質・体力を持ちつつ、賢明に行動できることである。

IV. 運動競技におけるディオメデスの特性：才覚 (μῆτις) を活かす戦車競技

戦車競技ではディオメデスと4人の競技者が登場し、8種目の競技において最も多い英雄参加があり、描写の行数は389行に亘っている。他の7種目は拳闘、角力、競走、槍の格闘、銃鉄投げ、弓競技、槍投げであるが、競走に関するその行数は58行である。『イリアス』において戦車競技は注目すべき運動競技 (ἄεθλος) である。

戦車競技の勝利の要因について、知恵ある英雄ネストルは参加する息子アンティロコスに対して力 (βίη)

よりも才覚 (μητις) の優位性を語っている。

ἀλλ' ἄγε δὴ σύ, φίλος, μήτιν ἐμβάλλεο θυμῷ
παντοίην, ἵνα μή σε παρεκπροφύγησιν ἄεθλα.
μήτι τοι δρυτόμος μέγ' ἀμείνων ἢ βίηφι
μήτι δ' αὖτε κυβερνήτης ἐνὶ οἴνοπι πόντῳ
νῆα θοὴν ἰθύνει ἐρεχθομένην ἀνέμοισι
μήτι δ' ἡνίοχος περιγίγνεται ἡνίοχοιο.

27)

「されば俸よ、そなたはあらゆる才覚を胸に叩き込んで、賞品が手を摺り抜けてゆかぬようにするのだぞ。樵も力でよりは才覚で遙かによい仕事をするし、舵取りが葡萄酒色の海の上で風に揺すぶられる船を誤らずに操るのも才覚を働かしてするのであり、手綱を取る者が他の同業に優るのも才覚次第なのだ。」²⁸⁾ この助言における力 (βίη) は、体力、身体的強さ、身体的能力を意味する。樵はその時々々の状況に応じて樵の力を活かし、舵取りは海や風の状況に応じて舵取りの力を働かせることにより良い仕事が可能となる。その時々々の状況把握は才覚 (μητις) の働きである。戦車競技において才覚 (μητις) の働きを活かす時、力 (βίη) が良い成果をもたらすことを経験豊かな英雄ネストルは息子に語っている。

戦車競技は、雨に腐らずにある古い木を折り返しの目印とした²⁹⁾、平地を駆ける競技である。この木には両側に白い石が2つ立掛けてある³⁰⁾。戦車競技のこの折り返しに関して、英雄ネストルは息子に語っている。

τῷ σὺν μάλ' ἐγχρίμψας ἐλάαν σχεδὸν ἄρμα καὶ ἵππους,
αὐτὸς δὲ κλιθῆναι εὐπλέκτῳ ἐνὶ δίφρῳ
ἦκ' ἐπ' ἀριστερὰ τοῖον· ἀτὰρ τὸν δεξιὸν ἵππον
κένσαι ὁμοκλήσας, εἰζαί τέ οἱ ἡνία χερσίν.
ἐν νύσσει δέ τοι ἵππος ἀριστερὸς ἐγχριμψθήτω,
ὥς ἂν τοι πλήμνη γε δοῖσσεται ἄκρον ἰκέσθαι
κύκλου ποιητοῖο· λίθου δ' ἀλέασθαι ἐπανρεῖν,
μή πως ἵππους τε τρώσῃς κατὰ θ' ἄρματα ἄξις·

31)

「さればそなたはここで、車と馬とをぐっと近づけて走らせ、自分は頑丈に編んだ座席の中で、二頭の馬の左手へ軽く身を傾けよ。右の馬には声をかけて鞭を当て、手綱を弛めてやれ。左の馬は標柱すれすれに、堅固な車輪の轂がその縁に触れるかと思われるほど近づかせよ。石には心して触れぬようにせよ、馬を傷つけ車を壊すようなことがあってはならぬからな。」³²⁾ このような状況を考慮せず、力の勢いだけで標柱を折り返すことになれば、馬が思わぬ怪我をしたり車が壊れたりして、良い結果が得られないことを父は息子に助言している。戦車競技における折り返しの目印に関する状況把握とその状況に応じた力の活用こそが、第23歌の戦車競技の勝利に繋がるのである。

英雄ディオメデスは、馬術に勝れたエウメロス、スパルタ王メネラオス、若い英雄アンティロコス、武勇の優れたメリオネスと競技を開始する。彼ら5人は、英雄ネストルが語った標柱を折り返し、最後のコースにおいて激しい競争を展開している。特に英雄ディオメデスに関しては、アポロン神に関わる名馬を操るエウメロスと勝利を懸け、どちらが優勝するか判断できない競争が語られている³³⁾。その時、アポロン神がエウメロスに、また女神アテネがディオメデスに関わる。結果として英雄ディオメデスが勝利することになる。

以上のような戦車競技の展開を考慮すると、特に5人の英雄たちが無難に標柱を折り返し、最終コースに辿り着いていたことを意識すると、以下のことが理解可能である。戦車競技における英雄ディオメデスは才覚 (μητις) の働きを活かした力 (βίη) による競争を展開していたこと、このことである。

V. 結論と今後の課題

1. 結論

戦車競技の勝者となった英雄ディオメデスは、命懸けの競争である戦争において、「賢明さ」: 知恵 (νόος)・

才覚（μητις）・思慮（νόημα）をもなった行為を行っている。軍神アレスとの戦いおよびトロイア軍偵察において勇氣（θάρσος）と力（μένος）を「賢明さ」によって活かしつつ戦場で活躍している。

また、第23歌の運動競技を代表する戦車競技において、英雄ディオメデスは才覚（μητις）の働きを活かした力（βίη）による競争を展開していたことが理解可能である。

2. 今後の課題

知恵（νόος）・才覚（μητις）・思慮（νόημα）に関するそれぞれを再検討し、これらの関係性を明らかにすることである。

また、本研究ではμένοςを身体的「力」、βίηも同様に理解したが、文脈によって意味の把握が異なるため、これらの語に関する再吟味が必要である。

さらに、μένοςとβίηの再検討による両者の関係性をより明確にする必要がある。

<付記：本研究は、日本体育学会第62回大会（平成23年9月、鹿屋体育大学）の研究発表に基づく研究であり、日本体育学会平成23～26年度文部科学省科学研究費「『イリアス』の運動競技における精神性に関する研究」（代表者：小林 日出至郎）の研究成果の一部である。>

- 1) 本研究におけるἄεθλοςは、呉茂一訳『イーリアス』（岩波文庫）や松平千秋訳『イリアス』（同左）では「競技」として表現されているが、第23歌においてἄεθλοςは明らかに運動文化を表現しているので、「競技」という訳ではなく、「運動競技」として訳する。
- 2) R.ハルダー（松本仁助訳）『ギリシアの文化』北斗出版1995（Harder, R. “Eigenart der Griechen; Einführung in die Griechische Kultur” Verlag Herder GmbH & Co. KG, 1962）, Gardiner, E.N. “Greek athletic sports and festivals” London, 1910（岸野雄三訳『ギリシアの運動競技』プレスギムナスチカ, 1981）, J.ブルクハルト（新井靖一訳）『ギリシア文化史 第四卷』筑摩書房1993
- 3) 『ギリシアの文化』（前掲書）205頁、『ギリシアの運動競技』（前掲書）22頁、『ギリシア文化史 第四卷』（前掲書）126頁参照。
- 4) 小林日出至郎、新潟大学教育学部研究紀要、第2巻第1号、2009、53～64頁
- 5) 小林日出至郎、日本体育学会第61回大会研究発表資料、2010、B5；1～7頁
- 6) 「歌」は書物において通常、「章」として表現される。本研究では、呉茂一訳『イーリアス』においては「書」として表現されているが、松平千秋訳『イリアス』（岩波、1996）の表現を用いる。
- 7) 松平千秋の訳が岩波版としては新しいためである。
- 8) ホメロス（松平千秋訳）『イリアス』（岩波、1996；以下『イリアス』と略す）V1～3；2行目のμένοςについて松平も呉も「力」と訳している。本研究ではこの「力」を体力、身体的強さ、身体的能力として捉えるが今後の課題である。同じ2行目のθάρσοςについて松平は「勇氣」と訳し、呉は「勇猛心」と訳しているが、本研究では松平の訳とする。第5歌全体を通して、英雄ディオメデスの活躍が表現されているが、V1～3行目において、この英雄が活躍するように女神アテネが彼に勇氣（θάρσος）と力（μένος）を与えたことが語られている。
- 9) *Il*.5.84～94.
- 10) 『イリアス』5.84～94.
- 11) 『イリアス』5.95～105.
- 12) *Il*.5.181～187.
- 13) 『イリアス』5.181～187.
- 14) 『イリアス』5.331～346.
- 15) 『イリアス』5.453～459.
- 16) *Il*.5.127～132.
- 17) 『イリアス』5.127～132.

- 18) 『イリアス』 5.825 ～ 835.
- 19) 『イリアス』 5.835 ～ 863.
- 20) 『イリアス』 21.233 ～ 283.
- 21) 『イリアス』 20.259 ～ 352.
- 22) 『イリアス』 10.222 ～ 226. 226行のνόοςを松平は「考え」、μητιςを、策として思いつく「案」として訳している。前者を呉訳では、気配りという意味での「気」として、後者を「計りごと」としている。本研究ではνόοςを「物事を状況に応じて適切に処理する能力」（柴田武・山田進編『類語大辞典』講談社2002）として理解し「知恵」と訳し、μητιςを「知恵をすばやく働かせる能力」の「才覚」として訳する。どのように訳するかは今後の課題である。
- 23) 『イリアス』 19.145 ～ 214.
- 24) 『イリアス』 19.161. ἀλκήは松平訳において「勇気」と訳されるが、研究ではθάρσοςを「勇気」として訳するため、呉訳の「武勇」を訳とする。ἀλκήの解釈は今後の研究課題である。
- 25) 『イリアス』 19.154 ～ 237.
- 26) 『イリアス』 19.218. νόημαに関して松平訳「思慮」を用いる。この用語についても「知恵」「才覚」と同様に今後の研究課題である。意味としては「注意深い考え」（柴田武・山田進編『類語大辞典』講談社2002）という理解もあるが、本研究では前後の文脈から長年の体験・経験に基づく「注意深い考え」として理解する。
- 27) *Il.*23.313 ～ 318.
- 28) 『イリアス』 23.313 ～ 318.
- 29) 『イリアス』 23.327.
- 30) 『イリアス』 23.329.
- 31) *Il.*23.334 ～ 341.
- 32) 『イリアス』 23.334 ～ 341.
- 33) 『イリアス』 23.377 ～ 384.